

様式2 令和4年度 清瀬市立清瀬第二中学校 学校評価表					
学校教育目標		愛情 より豊かな 心をつちかう 学力 より深く 自ら学ぶ 勤労 よりよくはたらき 責任をはたす 健康 よりたくましく 心身をきたえる		育成を目指す資質・能力及び特色ある教育活動	
目指す学校像(ビジョン)				・生涯学び続ける力・人間性の育成 ・ふるさと清瀬を誇りにし、持続発展の主体となる力 ・生きて働く知識・技能の育成 ・考える力、判断する力、表現する力 ・育てたい4つの心「感謝する心」「自他の発言、意見を大切にすること」「共に学ぶ心」「社会の中で活きている意識」 ・学校支援本部との連携	
【目指す学校像】		「笑顔とあいさつそしてありがとう」が溢れる清瀬二中			
【目指す児童・生徒像】		「自分で考えて行動する力」を持つ生徒			
【目指す教師像】		「生徒が主役であることを大切にし、感謝を忘れず、教師であることを誇りに思う教員」			
前年度までの学校経営上の成果と課題		・学力向上について、落ち着いた学習環境により、基礎的な学力の定着が見られるが、読み取る力や書く力(思考の文字化)に課題が見られる。 ・豊かな心の育成について、学校や学年の行事等の活動場が必要であるが、ここ2年間はコロナ禍による制約がある中での活動であった。本年度は、感染予防を図りながら、さまざまな活動を模索し実行することが課題である。 ・健やかな体の育成について、これまで給食指導を要とした食育を進めてきている。今年度は保健給食委員会等による生徒の自主自立的な活動や保健指導の更なる充実を図ることが課題である。			
柱	具体的方策	自己評価		学校関係者評価	次年度以降の改善方策
		評価	課題及び次年度以降の改善方策(案)	学校関係者による「自己評価」についての評価	学校関係者評価の結果を踏まえた改善方策
確かな学力の向上	課題解決のために個人で考える時間をとり、話し合い活動等により自分が学んだことや考えたことを活用、表現する場面を設ける。		コロナ禍の2年間は、制限を設けていたが、本年度はあらためて校内研修会で二中スタンダードを確認し、換気やマスク着用などの感染対策を行った上で話し合い活動などを復活させた。そして、次年度以降も、ICT機器を活用した話し合い活用をさらに進めて行く。	・授業改善の取組が生徒の思考力向上につながっている。 ・コロナ禍においても生徒の思考力を育成するための様々な工夫があり、成果が出てい	新型コロナウイルス感染症の予防対策を講じながら、継続して各教科の指導において生徒の思考場面や対話場面を設け、思考力・判断力・表現力の育成を図る。また、生徒が考えを示したり話し合ったりする活動においてクロームブックの機
	ICT機器の校内研修会等により、タブレットPC等の活用方法について学び、授業で実践する。		昨年度後期よりGIGA構想で導入されたクロームブックも1年が経ち、校内研修でも取り上げ、徐々に授業での利用率も上がり、授業評価でも52%の生徒が肯定的に答えている。しかし教科により利用状況の差があるので、来年度も研修を継続させる	・ICT機器を多くの授業で活用しており、個に対応した学習につながっている。 ・ICT機器活用についてさらに研究を進めて、学力向上や個に応じた指導につなげたい。	ICT活用に係る校内研修を継続実施し、クロームブックの思考ツール、発表ツールとしての活用事例について情報交換を行い、各教科の指導において適宜活用する。
豊かな心の育成	学校行事や学年行事、学級活動、委員会活動、授業に生徒が主体的に取り組むような指導計画を立て、実践する。		生徒による学校評価での生徒自身の肯定的な評価が88%であり、各専門委員会等では様々な取り組みをしているが、委員の活動のみならずは、生徒全員が参加するような取り組みをさらに展開する。	・生徒の挨拶がとて良く、教育活動を通して豊かな心の育成が図られていることが分かる。 ・体験を通して心を育む活動の充実をこれか	学校行事や学年行事、学級活動、委員会活動等において、生徒の主体的な取り組みを促し、支援していく。 生徒の取組を教師が価値付けるとともに、保護者、地域にも紹介し評価していただく機会を設けて、生徒の自己肯定感を高
	いじめ調査や学級適応感尺度調査を実施して、学級経営や面談に活用する。		学級適応感尺度調査では学習適応度は低い傾向があり、自学習の定着等の取組が必要である。ラインなどでのいじめにつながるトラブルを防止するために、SNS利用についての講習会などの取組を定期的実施する。	・地域から見て、生徒は落ち着いて学校生活を送ることができている。学校と保護者、地域が連携して生徒一人一人の心の課題に寄り添う指導や支援を継続することが望ましい。	引き続き、いじめ調査や学級適応感尺度等を活用し、生徒一人一人の心に寄り添った学級経営を行うとともに、各学年、学級において、自他を尊重することについて授業や特別活動を通して指導を重ね、豊かな心の育成を図る。
健やかな体の育成	体育の授業等において運動することの楽しさや自己の健康について指導する。		本年度は、競技など経験の差が少なく、誰でもが運動を楽しめる種目としてフライングディスク競技を取り入れた。来年度からは、男女共修が始まるので、授業方法や新たな種目を取り入れるなどの改善をする。	・運動経験等に差がある中で、生徒が主体的に運動を楽しめるような活動が望ましい。 ・男女共修の授業方法について研究を進めて、生徒の体力向上に努めたい。	男女共修となる保健体育科の授業において、生徒一人一人が目標をもち、運動を楽しみながら体力向上を図ることができ授業を展開する。男女共修の授業方法や取り組み競技等についての情報収集に努め、必要に応じて外部講師を招聘して
	食育に係る学習を計画するとともに、食育だよりや保健だより等を通して健康に関する情報を発信する。また生徒が自分の生活を見直す活動を実施する		栄養士による授業や給食めもなどの食育活動や保健給食委員会の取り組みによりSDGsの意識の高まりなど、全体の残菜率は減少したので、次はひとり一人が健康を考えた食育指導を深める必要がある。	・朝食の内容が気になるところである。正しい知識をもって栄養を摂ることができるように食育指導を継続することが望ましい。併せて家庭への啓発も図りたい。	栄養士と担任の連携による給食指導を継続して行い、食育の推進に努める。また、生徒が家庭科や保健体育科の授業で学んだこと生かして、自分の生活について考え、適切な栄養摂取や休養について実践していけるように指導する。
特別支援教育の充実	特別支援委員会を中心とした情報交換や指導方法等に係る検討会を定期的に実施する。		校内委員会にサポートルームの教員が参加し、より幅広く情報交換をすることができたので、この情報を効率良く全教員間で共有することが課題であり、ICT機器の活用などを進める。	・今後も特別な支援を必要とする生徒に対して、教員が連携して適切な支援を行うことが望ましい。	校内委員会において、配慮を要する生徒への指導・支援方法を検討し、各学級における指導に生かす。また、今年度作成した情報共有シートを活用して、配慮を要する生徒への具体的な指導・支援方法について全教職員で共通理解を図る。
	特別支援委員会を中心とした外部のアドバイザーによるカンファレンスや特別支援学級開設に関する研修会等を実施する。		外部のアドバイザーによる巡回相談や特別支援学校の地域コーディネーターによる支援・研修会を今後も継続し、来年度からは特別支援学級(固定級)が開級するのに合わせて、インクルーシブ教育を推進する。	・特別支援学級の開設にあたり、教員研修や施設、設備の整備等があり多用であるが、外部機関等と連携してインクルーシブ教育の推進を図ることに期待する。	指導主事や特別支援学校の地域コーディネーターを招聘して、特別支援教育に係る研修会を学期ごとに行い、特別支援教育の視点による授業づくりや学年・学級経営について共通理解を図るとともに、生徒への指導・支援に生かしていく。
本校の特色	学生や保護者・地域の方と連携してボランティア活動を実施する。		学校行事や各種検定でのワンデーサポートや花ボランティアによる環境整備への協力などを継続し、さらに学力向上の取組として、地域や学生ボランティアの協力を得て、放課後の学習室の開室などを試みる。	・保護者や地域の方は協力的なので、引き続き様々なボランティア活動への参加を呼びかけていきたい。放課後学習室の取組についても学校支援本部と連携して実施することに	学校支援本部との連携により、学校行事や各種検定でのワンデーサポート、花ボランティアによる環境整備への協力などを継続するとともに、保護者、地域の方々、学生ボランティアの協力を受けて、放課後学習室を開室、運営する。
	学校だより、学年だより、ホームページ等を活用して情報を発信する。		各学年便り等の発行数は総計で200号を超えて学校評価では肯定的意見が89%と改善したが、アンケートの学校のようにする項目で「わからない」との回答が20%を超えるものもあるので、授業参観などで来校してもらう機会を増やす	・校内に掲示してある生徒の作品が素晴らしいので、多くの方に見てもらおうと良い。今後もホームページ等を活用して教育活動の様子を発信していくことが望ましい。	ホームページや学年だより等による情報発信を継続実施するとともに、新型コロナウイルス感染症予防対策を講じながら授業を公開する機会を設け、特色ある教育活動を展開している様子を保護者、地域の方々に参観していただく。